

調査団は、設立から5年目となり、現在の団員は848名になりました。報告件数は、延べ22,000件（年間約6,500件・週平均120件）です。3月3日に行った「調査フォーラム」では、子どもと自然体験に関する講演や希少種等の生息情報の公開の仕方についての説明、団員2名からの事例紹介などがありました。

平成24年度生命のにぎわい「調査フォーラム」を開催しました！ 平成25年3月3日

（1）講演「子どもと自然体験」

県生物多様性センター 中村俊彦

幼児期に自然の中で遊ぶ、生きものと触れ合うことで、子どもの生きる力と豊かな感性が育まれ、そして、いのちの大切さを知ります。「生命（いのち）のにぎわい」とつながりを子どもたちの未来へ「つなげて行くために、自然体験は欠かすことができないのです。」

生物多様性教育とは、自然環境の現状と伝統文化の大切さを理解し、生物多様性を守り、適切に利用して、豊かなこころを育むことであり、持続可能な暮らしのために大切な教育です。

（2）報告「調査団の活動状況と報告結果について」

県生物多様性センター 柴田るり子

2月に行った「団員の調査団活動以外の取組みと活動の状況の聞き取りアンケート」（回答43名）の結果について説明しました。

- ・観察会や講演会等の子どもや地域の人へ自然・生物多様性の大切さを伝える機会を持っている人が22名（53%）であり、年間約3,000名へ伝える機会があると推定されました。
- ・個人または団体で運営するウェブサイトなどの伝える活動を行っている人が12名（30%）でした。
- ・個人・団体で自然保護活動を行っている人が31名（73%）でした。

団員からの報告は13,700件（キジ、カワセミ等の鳥類が多い）あり、種ごとの発見報告マップにまとめて説明しました。また、季節報告（ウメ開花やアカガエル産卵など）の年ごとの比較を行い、今年は例年より生物の活動が遅れていることを示しました。

これらの報告は、地理情報システムに入力して、県レッドデータブックや外来生物の生息状況などの作成に活用されています。

また、センター刊行のハンドブックなどの各種刊行物において、報告写真が活用されていることなど、調査団の活動は、県民参加型モニタリングの役割と希少種を守るなどの県施策へ反映されている旨を説明しました。

そして、調査団員による地域の生態系のモニタリングが、今後の地域の保全活動や地域連携を促進していくことにつながることを話しました。

（休憩時間には「平成24年度写真コンテスト」の審査・投票を行いました。）



（3）団員からの情報提供「観察事例の紹介」

- ①「千葉市若葉区の学校周辺に残された自然・生物紹介」 高見 等さん
- ②「野鳥を観察、撮影するときに気をつけること」 中込 哲さん

平成24年度調査団「写真コンテスト」の審査結果



最優秀賞 a0195

「絶対に、離さない

からね。」ヤマカガシ
二匹のヤマカガシが、アカ
ガエルを飲み込もうとしてい
ます。生命をつなぐことは、
時には厳しい現実を教えてく
れます。



優秀賞 a0285

「鵜呑み」ウシガエル
を捕まえたカワウ

カワウが、特定外来生物の
ウシガエルを捕まえて食べる
の決定的な瞬間です。

写真コンテストの最優秀賞、優秀賞の写真は、次年度のセンター年報の表紙と裏表紙を飾るとともに、県の刊行物で紹介使用します。応募作品についても、県内の巡回展示や生物多様性サテライト等で掲示するポスターや当センターの刊行資料で活用していきます。

特定外来生物「オオキンケイギク」は栽培してはいけません！



オオキンケイギク「特定外来生物」
a0365 撮影



花拡大 a0294 撮影



八重咲き a0724 撮影

北アメリカ原産の宿根草。繁殖力が旺盛で、在来の生態系へ悪影響を与える恐れがあるため、外来生物法において特定外来生物に指定されています。栽培や生きたままの運搬が禁止されています。全国各地、県内でも広い地域で、道路脇や空き地で繁茂しています。5月から開花しますので、種子をつける前に、根から株ごと引き抜き、ゴミ袋に入れて枯死させるなどしてから、自治体のゴミ分別に従って処分しましょう。本種の同定や防除については、「環境省の外来生物法」のウェブサイト <http://www.env.go.jp/nature/intro/> を参照してください。

〇似ている黄色い花の植物：キバナコスモス（秋に咲く）、マリーゴールド、ナルトサワギク「特定外来生物」、ブタナ「要注意外来生物」ほか

「メダカ」をめぐる最新情報

川に泳いでいるメダカは、本当に千葉県「ミナミメダカ」ですか？ カダヤシ「特定外来生物」ではないでしょうか？
メダカは、千葉県レッドデータブックでは重要保護生物（B）、環境省レッドデータリストでは絶滅危惧Ⅱ類（VU）です。写真上段は♀、下段は♂



ミナミメダカ a0189 撮影

「メダカ」

日本産メダカは、近年、ミナミメダカ、キタメダカの2種に分けられました。卵を産み、しばらく腹につけた後、水草に産みつけます。生態は、水田や稲作文化と結びつきが強く、「水田の魚」として全国各地で数多くの方言名で呼ばれるほど馴染まれてきた魚です。



カダヤシ「特定外来生物」a0189 撮影

「カダヤシ」

北アメリカ原産のグッピーの仲間です。蚊の幼虫を退治するため、沼や用排水路に放流されました。卵胎生（卵を体内で孵化させ子魚を産みます。）繁殖力が強く、成長が早いので、他の淡水魚の卵や稚魚を捕食したり、攻撃します。

〇メダカが生息できなくなってきた

メダカは、稲作つまり水田や周りの水路との関わりが深い生態をしています。

童謡「めだかの学校」に唱われ、日本の故郷の光景である小川で群泳するメダカは、生息場所の減少、水質悪化、農薬の使用、乾田化などによる生息環境の悪化、そして、外来生物（アメリカザリガニ、オオクチバス、ブルーギル）による捕食などにより減少しています。

また、カダヤシは、メダカと競合して、生息場所や餌を取り合い、メダカを攻撃して、追いやってしまいます。

〇国内のメダカが2種に分類され、千葉県内に本来生息するメダカは、ミナミメダカ（東日本型）となりました

同一種と思われてきたメダカは、遺伝子組成が異なる南北の2集団があり、それぞれが独自の生態に分化していることが明らかになり、形態も異なることなどから、別種とされました。

〇メダカを放流すると遺伝子が交雑し、本来の地域ごとの遺伝的多様性が失われてしまいます

観賞魚としてペットショップ等で販売しているヒメダカ、シロメダカ、楊貴妃メダカなど体色や形態が変異した改良種メダカや、野生色（黒）に見えるメダカでも、生産地の不明なメダカは、**県内の川へ絶対に放流しないでください。**

〇メダカとカダヤシを見分ける

メダカとカダヤシは、腹の下につく尻ビレの形で見分けることができます。メダカは、尻ビレの付け根が長くて平行四辺形ですが、カダヤシは付け根が短くて台形（♀）や棒状に突き出て（♂）います。また、尾ビレの形は、メダカが台形であるのに対し、カダヤシは台形に丸みを帯びた形です。

カダヤシは、**特定外来生物**であるため、水槽で飼育することはできません。カダヤシは、卵胎生（卵を体内で孵化させて子魚を産む。）です。「メダカと思う魚を採ってきて飼っていたら、急に子魚が産まれた。」という場合はカダヤシである可能性があります。

＜これからの季節に観察できるもの＞

調査対象種：アマサギ、オオキンケイギク（「特定外来生物」）、ヤマユリ、ハマヒルガオ

* セミの初鳴き：ヒグラシ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、* モリアオガエル（卵）

* 調査対象種以外の報告（猛禽類、鳥類、植物、昆虫）には、判別するために必ず写真を添付願います。

* 希少生物（生息・生育数が減少している生物）や外来生物（**特定外来生物**・**要注意外来生物**）の報告も受けています。